

社報 御霊本宮

第76号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
4月15日

水分神

「水分」は「みくまり」と読みます。

「水」は「み」、「分」は「くまり」で「配る」「配分する」の意です。水分神は分水嶺に多く祀られています。

古事記には、「速秋津日子と速秋津比売の二柱の神が、河と海とを分け持ち、生んだ神の名は沫那芸の神、次に沫那美の神、次に類那芸の神、次に類那美の神、次に天之水分の神、次に国之水分の神、次に天之久比奢母智の神、次に国之久比奢母智の神。」とあります。

沫那芸・沫那美の沫は泡のことで、ナギ・ナミはそれぞれ男女を示しています。イザナギ・イザナミと同じです。類那芸・類那美のツラは面で、水面を意味します。久比奢母智は「汲匏持」

で、匏とは、瓢箪または柄杓のことで、ヒサゴで水を汲んで施す神という意味になります。

天之水分神は、山頂の水の分配を司る神を意味し。国之水分神は、地上の水の分配を司る神であることを意味します。

水分神を祀る神社は全国にありますが、延喜式内社として大和国には葛木、吉野、宇太、都祁の水分神社があります。なかでも吉野水分神社に関しては、六九八年（文武天皇二年）に雨乞いのために馬を献じたことが、続日本紀にみえています。

吉野水分神社は、天之水分大神を主神とし七柱を祀っています。社殿は慶長九年（一六〇四）に豊臣秀頼によって再建されたものです。建物は桃山時代の美しい特色を今に伝えており、三殿一棟造りの本殿（重要文化財）、拝殿（重

要文化財）、幣殿（重要文化財）、楼門（重要文化財）、回廊（重要文化財）からなります。社室として、非公開ですが、鎌倉時代作の木造玉依姫命（神武天皇の生母）坐像（国宝）があります。

水分神は、水の神、農耕の神ですが、のちには「くまり」を「こもり」（子守り）と訛り、子供守護の神として信仰されるようになりました。

西吉野町百谷には井森神社がありますが、井森は井守であろうと思われる。井戸を守る、つまり水源地を守るための神社であると考えられます。



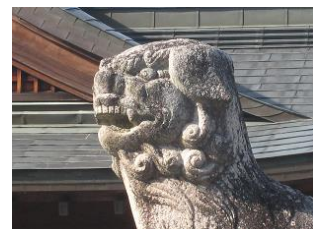
吉野山の水分神社

宇智郡 狛犬めぐり

黒駒町 御霊神社

桜田門外の変が

あった万延元年（一八六〇）の奉納で、像高が九十五cmあり、市内で二番目に大きな狛犬です。



体全体が四角形で、前脚の付け根から頭部まで長いことから、背伸びをしているようにも見えます。尾は団扇型ですが、よく見ると阿形は尾の先が尖っています。尻形の尾の先は尖っていません。

頭部も四角で、耳は大きく、垂れ下がっています。



花高稲荷神社

須恵町の統神社の境内に、花高稲荷神社があります。この花高稲荷は、もと五條代官所に祀られていたもので、のちに統神社に移設されました。

文久三年（一八六三）八月、天誅組の変が起きました。時代は天皇を崇拜する思想の尊皇派と外国を排除する思想の攘夷論が結びつき、幕府を倒して天皇が政治を行う社会をつくろうとする動きが活発化していました。

三条実美ら尊王攘夷派は、孝明天皇が大和行幸し春日大社で攘夷を祈願することに、討幕の兵を挙げるといふ討幕の策を練りました。そして八月十三日、大和行幸の詔が発せられました。これを受けて、討幕軍の先鋒になろうとした天誅組の武士たちが京都を出発し、十七日の夕刻に五條代官所を襲撃しました。

天誅組は代官の鈴木源内らを斬首し、代官所を焼き払いました。代官所



は全焼したとのことでしたが、代官所の敷地内に祀られていた花高稲荷神社は燃えずに残ったということです。

この稲荷神社のお社の背面に次のような墨書があります。上部中央に「寄附」、下部に「御代官 内藤左左衛門藤原忠俊 手付 鯉江幸蔵源貞 永 手代 柏木音太郎藤原典常 加藤督郎藤原行道 小林幹二郎平逼 浅尾信十郎平胤篤 田川音七郎藤原 敬徳 桑名佳十郎源謹 鯉江邦治源 貞敬 手付 富田八十五郎藤原信睦

嘉永四年辛亥年二月初午

嘉永四年（一八五二）に当時の代官である内藤左左衛門藤原忠俊をはじめ、手付や手代であった九名がこのお社を奉納したということになります。嘉永四年は、天誅組の変が起きる十二年前にあたり、代官内藤左左衛門藤原忠俊は、鈴木源内の二代前の代官になります。少なくとも天誅組の変が起きる十二年前から、この稲荷神社が代官所に祀られていたこととなります。

五條で生まれ育った高橋直吉が書いた「天壽録」には、天誅組の変に関する詳細が記されています。その中に「その日の夜九時頃、陣屋（代官所）の書類を講御堂（寺）に移し、その跡へ鉄砲を打ち込み、陣屋は悉く皆燃え上がった。陣屋の中にあつた花高稲荷神社は全く神力が無かつたにもかかわらず、後に須恵統神社に移して敬拝された」と記されています。神威により社は燃えず、統神社に移して祀られたということが明記されています。

八百万の神々

建速須佐男命

伊邪那岐命が阿波岐原で鼻を洗ったときに生まれた神です。伊邪那岐命から海原を治めるように言われましたが、母の伊邪那美命がいる国に行きたいと泣いてばかりいました。そのため伊邪那岐命が怒り、高天原から出て行くように言われました。

この後、須佐男命は天照大神に出逢いに行きますが、悪心があるのではと疑われます。それで、悪心がないかどうかを判断するため、天照大神は須佐男命の十拳の剣を噛み砕いて吹き出すと、その狭霧から多紀理毘売命・市杵島比売命・多岐都比売命が生まれました。女神が生まれたことで悪心がないとされました。しかし、高天原で大暴れしたため罰せられて追放されました。出雲国に至った須佐男命は八岐大蛇を退治する英雄となりました。

御霊信仰発祥の地をめぐる

歴史ウォーク

五條市立五條文化博物館では、御霊神社本宮をはじめ、霊安寺跡や井上内親王の伝説の残るところ、関連史蹟や社寺をめぐる「歴史ウォーク」を開催します。

日時 令和三年五月八日（土）

午後一時半～四時半

行程 本宮 ↓ 井上内親王の御園

跡 ↓ 霊安寺跡 ↓ 宇智陵 ↓

他戸親王墓 ↓ 火雷神社

歩行距離 約5km

集合 御霊神社本宮

参加費 五〇〇円

定員 三〇名

申込 五條文化博物館

受付専用ダイヤル

〇七四七（三〇）四七六一

締切 四月二十九日

ただし定員に達し次第終了

本宮所蔵品

衣冠男神立像



像高約四〇cm、幅約一〇cm、厚み約六cmの木像の衣冠立像が三体现存しています。これらの製作年、製作者、奉納者、その目的など、全く不明です。かろうじて室町時代の製作であろうと推測されているだけです。

この三体は、他戸親王のお子どもたちを表わしているのではないかと考えることができます。「御霊本宮神主代々記」には、「他戸親王第一之御子 従五位下 上彦」「他戸親王第二之御子 正六位下 奈津水」「他戸親王第三之御子 正八位下 宇津水」と記さ

れています。つまり、他戸親王には三人の御子があり、三人とも御霊神社の神主を務めていたということになります。衣冠立像は、みな神主の恰好であり、欠損していますが笏しやくを持つ男子のように見えます。

三体は、足の下部が差し込むことができるようになっており、台に取り付け安置されていたかと思われます。どこに祀られていたかは不明ですが、本殿や境内社など、現存する建物ではないようです。廃霊安寺りょうあんじ、現在の社務所地内にあったと思われる寺院またはお堂、社務所向かいに建立されていた神宮寺が考えられます。



早い開花に

驚く！

今年はいろんな草花の開花が早いです。桜は一週間ほど早く咲きました。専門家の話では、冬にしっかりと冷え込んだため、暖かくなつて草花は、例年以上の暖かさと感じたことによるのではないかと思います。桜だけなら驚かないのですが、五月に咲き始めるツツジやヤマブキも咲きました。新緑もきれいで、本当に五月のようです。今月上旬に吉野山に行きました。上千本でも花が散り始めていました。ここではヤマブキもシャクナゲも満開でした。五條より標高が高く寒いはずのこの吉野山でさえ、このような状態でした。



Instagram @goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

Twitter @goryohongu



日本書紀にみる

十一代垂仁天皇(三)

四年秋九月二十三日、皇后の兄である狭穂彦王は、謀反を企てて国を傾けようとなりました。

皇后が休息して家におられるときを伺い、皇后に向かつて、「お前は兄と夫といずれが大事か」と問いました。

皇后は尋ねられた意味が分らず、「兄が大事です」と言いました。

すると狭穂彦王は皇后に、「容色を以て人に仕えるのは、色香が衰えたら寵愛は終わる。今、天下に美人は多い。それぞれ寵愛されることを求めている。どうして容色だけを頼みにできようか。それでもし自分が皇位につけば、お前と一緒に天下に臨むことができる。枕を高くして百年でもいられるのは快いことではないか。どうか、私のために天皇を殺してくれ」と言いました。

そして七首(短刀)を皇后に授けて、「この七首を衣の中に忍ばせ、天皇が眠っておられるときに頸を刺して殺せ」と言いました。

皇后は心戦慄き、なすべきを知りませんでした。しかし、兄の志を思うと、たやすく諫めることもできません。その七首を独り隠すこともできず、衣の中につけました。

五年冬十月一日、天皇は来目にお越しになり、高宮におられました。時に、天皇は皇后の膝を枕に昼寝をされました。

しかし、皇后は事を行われませんでした。「兄の謀反はこの時なのに」と思うと、涙が流れて帝の顔に落ちました。

天皇は驚いて目を覚まされ、皇后に語って言われました。「私は今、夢をみた。錦色の小さな蛇が、我が頸に巻きついた。大雨が狭穂から降ってきて、顔を濡らすと見えたのは、何の兆しなのだろう」

皇后は謀を隠し得ないことを知って、恐れて地に伏し、詳しく兄王の謀反のことを申し上げられました。

「私は兄の王の志に違うこともできませぬ、天皇の御恩に背くこともできませぬ。告白すれば兄の王を殺すことになり、言わなければ国を傾けることになりませぬ。それで恐れと悲しみで、仰いでは咽び、感極まって血涙を流しました。昼も夜も苦悩のために胸につかえて、訴え申し上げることもできませぬ。天皇が今日、私の膝を枕に休まれ、もし狂った女が兄のため、この時にとでも思ったら、手間もかけずに成功するでしょうと、この思いがまだ終わらないのに、涙が溢れ、袖より落ちて、帝の顔を濡らしました。夢にご覧になったのは、このことの現れでしょう。錦の小蛇というのは、私が預かった七首です。雨が降ったのは私の涙です」

天皇は皇后に、「これはお前の罪ではない」と言われました。
(次号につづく)

万葉の花たち

ほほがしは(ホオノキ)

わが背子が 捧げて持てる 厚朴
あたかも似るか 青き蓋

僧恵行(巻十九・四二〇四)

「あなたがお持ちのホホガシハの葉は、まるで青いきぬがさのようです」



大伴家持が、奈良時代の越中国(富山県)に赴任していた時の歌です。僧恵行と家持が宴会で同じ「ほほがしわ」を題材にしました。

蓋は、貴人の外出の際、後ろからさしかざした長柄の傘のことです。ホホガシハの葉を日除けにでもしたのでしょうか。

ホホガシハの葉は大きく、長さ20cm以上、時に40cmにもなります。白色または淡黄色の大型の花が、六月ごろに咲き、芳香があります。